

町史

つとのおきの話

193

神奈川大学非文字資料研究センター協力研究者

ルシーニュ・フレデリック

▼今月号からは神奈川大学大学院博士後期課程に在籍しているルシーニュ・フレデリックさんが担当します。6回の連載です。

▼とっておきの話始まって以来、初めての外国人執筆者です。1997年から来日されていて、今では日本人以上に話も文章もお上手です。

▼神奈川大学の民俗調査で町民の皆さんにお世話になっており、今回はそのお礼を兼ねて、町のとっておきを連載していただくことになりました。



▲聞き取り調査をする筆者（左から3番目）

道具の記憶



私はフランス北東部のシャンパーニュ地方にあるランス(Rennes)という町で生まれ育った

フランス人です。人口25万人程度の都市ですから、町を出ると、広々とした平野を覆う集約農業の畑がすぐ近くにありまます。その向こうの地平線には「ランスの山」という丘の高さほどの山があり、その斜面にはブドウ畑の列が遠くに見えます。けれども、都会で青少年期を過ごした自分には、都会の人間だという自己認識が働いて、田舎の奇麗な景色に引かれても、農業の技術に関していえば興味が皆無に近いのです。このような都会出身のフランス人ですが、何が自分を只見町の民俗文化の価値に目を開かせたのか。簡単にいうと、それは、道具の記憶です。民俗学では、道具という用語よりも、道具使用者＝文化伝承者の存在を強調するために「民具」という学術用語を使うのが常ですが、私は只見町に赴いて初めてなるほどと納得しました。

というのは、只見町には何百年も、物によっては何千年にもわたって代々伝わった道具の使用法やそれに関わる農業知識全般、さらに口承伝承やいろいろな感情が道具の中に潜まれている、だからこそカヤ屋根の農家住宅が建て替えられる際、住民たちが民具を収集し記録する運動を始めた、という話を聞いて実に驚きました。さらに調べてみたら、山間地というきびしい自然環境に対応すべく伝統技術の豊富さと複雑さにも圧倒されました。そもそも、私が只見町を訪れるきっかけは、只見町の民具カードをデータベース化し、インターネット上で只見町のエコミュージアムを開発しようとする神奈川大学21世紀COEプログラムの第4班・地域統合情報発信班に参加したことからでした。この研究に携わるようになった経緯は偶然です。2003年、神奈川大学の博士後期課程に入学して間もなく、指導教授である佐野賢治先生の推薦で当時スタートしたばかりのCOEプログラムにリサーチ・アシスタントとして就きました。

しかし、最初は他の班に振り当てられて、長い間、佐野先生が担当する第4班の目的や内容に関して浅い知識しか持っていませんでした。「只見方式」の名で知られている只見町の民具カードの面白さも想像もつきませんでした。状況が変わったのは、2006年6月21〜23日の調査旅行の時だったと思います。その調査には、本当はもう一人の若手研究者が同行するはずでしたが、彼の親戚に不幸があったので、私が代わりに同行したのです。22日、只見町教育委員会の一階で行われた会議で、私が恐る恐る挙手して、システム開発における資料の配置について簡単な提案を述べたのですが、班に若手研究者が不足していたのか、あるいは先生が私にチャンスを与えてくださったつもりだったのか、とにかく、それを契機にチームに加わることになりました。そして徐々に只見町の民具カードのデジタル化作業を始めるようになり、後にはインターネット・エコミュージアムの開発などに向けて責任を与えられ、年に2、3回ぐらい只見

町を訪問するようになりました。まだ只見町の事情をよく知らない者ですが、町の住民たちが歩んで来た歴史や記憶が詰まった民具のデータベース化と、ネット上で世界中に情報を発信できるウェブサイトのシステム開発はまさに興味深いプロジェクトでした。幸いに、いろいろな方々のご協力を得て、ようやく2010年3月「只見町インターネット・エコミュージアム」のウェブサイトを完成することができました。この場を借りて協力していただきました町民の皆さまに深くお礼を申し上げたいと思います。

只見インターネット・エコミュージアムは、只見町のホームページから見ることができます。
URL (<http://www.himaji.jp/himaji/tadami-iten/index.html>)



▲只見方式によって記入された民具カード